

助教諭の体力・技能と教科体育への意識

森 清・阿部正臣・梶原洋子・メ木一郎

The Physical Fitness, Skill and Consciousness of Elementary School Teachers

Kiyoshi Mori・Masaomi Abe
Yoko Kajiwara・Ichiro Shimeki

序

文部省の推計によれば、第2次ベビー・ブームの到来により、ここ数年来、毎年小学校児童が20万人ずつ増加し、昭和60年前後に約200万人の小学校児童の増加が予想され、それに伴ない小学校教員も相当数増員せねばならない。

埼玉県では、過去10数年、人口増加率は全国第1位にあり、特に新興都市においては、ここ数年来の人口増から教育人口の増大の状況にあり、学校増設、学級増によって教員不足を来し、教員の需要の増大は著しい。県下の小学校在籍者数については、昭和48年度は約42万人、昭和51年度は約53万人、以後徐々に増加の一途にあり、昭和56年度には約70万人になると推計され、本年度の32%増が見込まれている。このような諸事情から、小学校教員を相当数増員さねばならぬ状況にあり、従来の小学校教員養成の体制では相当数の小学校教員の不足を来すことは明らかである。既に数年前から全国では数少ない県立教員養成所を設置し、2年課程で小学校教諭2級免許状を取得させ、優先採用し、教員不足の一部を補充している。しかしながら、未だなお小学校教員の需給のバランスはとれていない。昭和48年以降、毎年小学校教員の採用は約1,500名で、そのうち約600名は小学校教諭免許をもたず、これを「助教諭」として採用している。このような急場しのぎによって採用された助教諭を指導する一員として、また本学の教育学部の学生を指導する一員として、常に「教科教育や教材研究の内容は如何にあるべきか」という問題点に直面してきた。この問題点を検討していく過程で、「小学校教員は教科体育に対して如何なる意識を持っているのか」、そして「教科体育において指導の中核となる技能を一体どの程度持っているの

か」ということに発展し、本学に小学校教諭2級免許状取得のために通学している助教諭を対象に調査したものである。

本研究は現場の体育指導に直接あたっている小学校助教諭の体力・技能の実態、教科体育に対する意識と指導の実態、さらには体力・技能と意識の関係を明らかにするとともに、究極的には教員養成初等教育課程の教科体育のカリキュラムの検討のための基礎資料を得ようとするものである。

研究の方法

1. 測定について

(1) 対象者

埼玉県教育委員会から本学に委託された小学校助教諭350名を対象とした。有効数295名(男子122名、女子173名)対象者の内訳については図-1、図-2、表-1、表-2、表-2Aに示すとおりである。

図-1 対象者の年齢構成

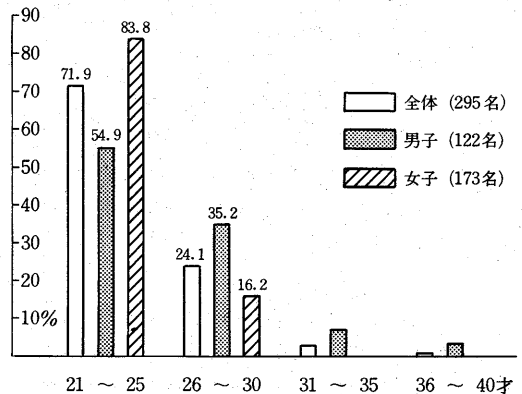


図-2 対象者の教職経験年数

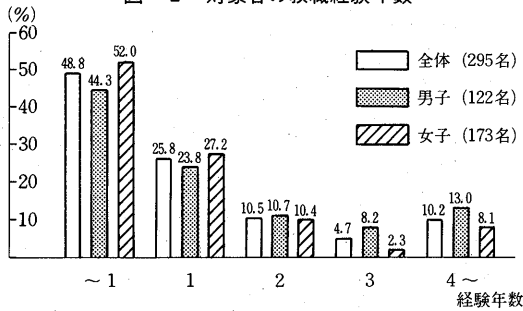


表-1 対象者の学歴

性別	学歴	
	短大	大学
全体	f	82
	%	27.3
男子	f	0
	%	0
女子	f	82
	%	47.4

表-2 対象者の運動経験

性別	運動部経験の有無			
	高校時代		大学(短大)時代	
	経験者	未経験者	経験者	未経験者
全体	32.1%	67.9%	10.3%	89.7%
男子	38.3	61.7	4.5	95.5
女子	28.3	71.7	15.0	85.0

表-2A 教員になった動機 (%)

項目	全体	男	女	短大率	学部率
ア 教育に対し興味・関心があった	36.5	41.8	32.9	24.4	41.3
イ 子供が好き	26.1	23.0	28.3	28.0	25.4
ウ 自分の性格に適している	20.0	22.1	18.5	19.5	20.0
エ 経済的に安定している	5.8	2.5	8.1	4.9	6.1
オ 男女の地位に格差がない	9.2	0	15.6	14.6	7.0
カ 親・兄弟から進められて	4.9	3.3	5.8	4.9	4.7
キ 先生から進められて	2.7	2.5	2.9	2.4	2.8
ク 先輩や友達から進められて	0.3	0	0.6	0	0.5
ケ 小・中・高の時に習った先生に尊敬する人がいたから	18.6	18.0	19.1	22.0	17.4
コ 何んともなく	2.7	2.5	2.9	3.7	2.3
サ その他	4.1	4.1	4.0	4.9	3.8

(重答)

(2) 測定期間

昭和50年10月

(3) 測定項目と方法

小学校助教諭の体力と技能の実態を把握するために、下記の項目について実施した。

体力

教員が指導上あるいは示範上、影響を及ぼすと思われる基礎的能力の要因としての瞬発力、敏捷性、柔軟性をみるために、文部省「スポーツ・テスト」の体力診断テストから①垂直とび ②立立体前屈 ③反復横とび、を選定し運動能力テストから④50m走、を選定した。

技能

教員が最低この程度の基礎的運動技能の習熟がなされていないならば、指導上、示範上、困るのではないかという観点から(a)器械運動；前転、後転、さか上がり、腕立て開脚とび、腕立て閉脚とび (b)陸上運動；走り高とび、

障害走 (c)ボール運動；的あて、インステップ・キックを選定した。

測定の要領、評価基準は下記のとおりである。

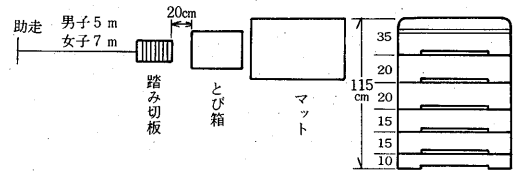
(a) 器械運動

〔前転〕〔後転〕 手のつき方、頭の入れ方などにおいて無理なく行なえたもの「できる」、手のつき方、頭の入れ方が悪く、スムーズに行なえなかったもの「不完全」、片方の腕に体重がかかり大きく曲がったり、起き上がれなかったもの「できない」とした。

〔さか上がり〕 胸の高さで順手で行ない、鉄棒の真下の白線から片足および両足踏み切りで実施した。無理なくスムーズにできるもの「できる」、できることはできるが、ごちなくスムーズでないもの「不完全」、全くできないもの「できない」とした。

〔腕立て開脚とび〕〔腕立て閉脚とび〕 図-3に示したとおりに実施し、無理なくスムーズにとび越せたもの「できる」、ごちなく無理なとび越しのもの「不完全」、とび越せない、または馬のりになったもの「できない」とした。

図-3



(b) 陸上運動

〔走り高とび〕 とび方は自由とし、同じ高さを2回試技できる。男子は100cmから10cm刻みで、110cm、120cm、130cmの4段階、女子は90cmから10cm刻みで、100cm、110cm、120cmの4段階の「とべた」、「とべない」をみた。

〔障害走〕 50mの距離にハードル5台設置し、スタートから第1ハードルまでの距離を13m、各ハードル間の距離を8m、第5ハードルからゴールまでの距離を13mとした。ハードルの高さは男子76.2cm、女子60cmとした。ハードリングに優れ、スタートからゴールまでリズムカルであるもの「A」、ハードリングに難点はあるが、スタートからゴールまでリズムカルであるもの「B」、ハードリングおよび中間走に難点があり、全体的に不十分であるもの「C」とした。

(c) ボール運動

〔的あて〕 男女とも的までの距離を20mとし、ソフトボールを使用して助走はその場からの自由な投球、2投実施した。なお、的の大きさは男子直径1m、女子直径2mとした。ボールが壁に届かなかったもの「とどかない」、ボールが的にあたらなかったもの「あたらない」、

ボールが的にあたったもの「あたり」とした。

〔インステップ・キック〕 男子はキック位置から10mのところから第1ハードル、15mのところから第2ハードルを、女子はキック位置から5mのところから第1ハードル、10mのところから第2ハードルを設置し、床に置いた静止したサッカーボールをその場からインステップ・キックで2回実施した。ボールが第1ハードルを越えなかったもの「とどかない」、ボールが第1と第2ハードル間に入ったもの「とどいた」、第2ハードルを越えたもの「オーバー」とした。

2. 意識調査について

(1) 対象者は1-(1)と同様である。

(2) 調査期間

昭和50年11月～昭和51年1月

(3) 調査項目と方法

教科

①小学校8教科の好き・嫌い ②小学校8教科の指導の難易性 ③教科体育の指導の難易性および各運動領域別指導の難易性 ④教科体育の指導しにくい理由およびその対策としての指導力をつける方法など。

授業運営

①授業中の準備・整理運動の行ない方 ②授業中の示範の有無 ③授業中の指導上の留意点など。

教科外

①休み時間などにおける児童とのあそびの度合 ②体育クラブの指導状況。

以上の調査項目について、質問紙法による配票調査にて実施した。

3. 結果と集計処理について

体力は各項目毎に男女別、年齢別の分布幅、平均値、標準偏差を算出した。技能は各項目毎に男女別、年齢別のパーセンテージを算出した。意識調査は各項目毎に男女別、学歴別、経験年数別、担当学年別のパーセンテージを算出した。

上記の集計処理には東芝の電子計算機TOSBAC-5600を使用した。

結果と考察

1. 体力と技能の実態

(1) 体力について

本研究においては、教員が指導上、あるいは示範上、影響を持つと思われる敏捷性、瞬発力、柔軟性などをみるために、反復横とび、垂直とび、50m走、立位体前屈

の4項目について測定した結果、表-3、表-4の如き結果を得た。

表-3 男子の形態・体力

項目	年齢 人員	22~23	24~25	26~27	28~30	31~39
		25	42	29	14	12
身 長 (cm)	X	168.21	168.2	167.5	165.8	165.4
	S.D.	4.59	5.64	5.15	5.32	5.24
体 重 (kg)	X	59.2	60.5	58.3	62.6	59.8
	S.D.	6.46	8.03	5.69	6.25	8.47
胸 囲 (cm)	X	88.9	88.4	88.1	88.7	85.5
	S.D.	4.84	5.87	4.91	4.78	6.87
坐 高 (cm)	X	86.5	88.1	87.7	86.8	89.7
	S.D.	4.38	4.59	5.54	3.85	4.71
垂 直 と び (cm)	X	58.46	58.47	55.87	52.64	52.58
	S.D.	6.67	6.57	6.81	5.14	5.82
立 位 体 前 屈 (cm)	X	12.79	13.99	12.55	12.07	10.86
	S.D.	5.24	5.09	6.21	6.16	5.76
反 復 横 と び	X	37.33	39.94	37.00	38.85	37.08
	S.D.	6.16	4.08	6.73	5.76	6.32
50 m 走 (秒)	X	7.10	7.12	7.25	7.38	7.67
	S.D.	0.380	0.491	0.431	0.413	0.523

X 平均値 S.D. 標準偏差

表-4 女子の形態・体力

項目	年齢 人員	21	22~23	24~25	26~27	28~30
		23	68	54	23	5
身 長 (cm)	X	155.3	156.3	155.7	157.1	156.2
	S.D.	4.24	4.77	5.06	5.07	5.56
体 重 (kg)	X	49.8	50.2	50.3	50.8	47.6
	S.D.	4.52	5.26	5.23	4.75	7.00
胸 囲 (cm)	X	81.8	82.8	82.0	83.0	81.9
	S.D.	2.97	3.26	3.59	3.39	1.91
坐 高 (cm)	X	84.2	85.1	84.7	86.0	84.9
	S.D.	3.95	4.32	4.58	5.57	5.31
垂 直 と び (cm)	X	38.45	39.60	37.82	38.74	34.80
	S.D.	5.58	6.93	5.44	5.43	4.35
立 位 体 前 屈 (cm)	X	15.04	14.01	15.01	16.74	16.80
	S.D.	5.05	4.75	4.88	5.16	3.29
反 復 横 と び	X	36.35	37.73	36.98	37.00	38.40
	S.D.	5.42	5.29	4.81	3.46	3.88
50 m 走 (秒)	X	8.97	8.79	9.04	8.90	9.16
	S.D.	0.633	0.716	0.606	0.733	0.582

X 平均値 S.D. 標準偏差

図-1からわかるように、本研究の対象者である小学校助教諭の年齢層は20~30才に集中しており、男子では特に21~25才が全体の54.9%を占め、女子でも全体の83.8%を占め、比較的若い年齢構成からなっている。

表-3、表-4の体力・運動能力の結果をここには示していないが文部省「スポーツ・テスト」の成績判定基準表に参照してみると、男子では立位体前屈、反復横とびは各年齢層とも5段階評価の3段階にあり、垂直とびは22~27才が4段階、28才以降は3段階にあり、ほぼ中程度であった。また運動能力である50m走は得点20点中、22~25才が13点、26~27才が12点、28~30才が10点、31

～39才が8点と、ほぼ中程度であった。女子では反復横とび、垂直とびは各年令層とも5段階評価の4段階にあり、中の上と比較的優れたものであった。しかし、立位体前屈は各年令層とも3段階にあり、50m走は得点20点中、7～8点で少し劣っていた。

本研究における体力テストは文部省「スポーツ・テス

ト」から4項目を選定したに過ぎず、上記の結果だけで判断するのは早計と思われるが、小学校助教諭は必ずしも体力の優れている人達ではないと考えてよいであろう。

(2) 運動技能について

表-5、表-6は小学校助教諭の運動領域別技能の結果を男女別に調べたものである。

表-5 男子の運動領域別技能 (%)

領域	項目	年令 評価	全体 人員	年令					
				22~23	24~25	26~27	28~30	31~39	
器械	鉄(さか上がり)棒	片足できない	1.5	0	0	0	14.3	0	
		不完全	6.0	12.0	0	6.9	7.1	8.3	
		片足できる	9.0	8.0	4.8	6.9	7.1	16.7	
		両足不完全	30.8	20.0	40.5	24.1	28.6	8.3	
		両足できる	52.7	60.0	54.7	62.1	42.9	66.7	
		マ(前転)	できない	2.3	0	0	0	7.1	8.3
	マ(後転)	不完全	3.8	0	0	3.5	0	8.3	
		できる	94.0	100.0	100.0	96.5	92.9	83.4	
		できない	3.8	0	0	3.5	7.1	8.3	
		不完全	12.8	0	0	17.2	14.3	33.4	
		できる	83.4	100.0	100.0	79.3	78.6	58.3	
		運動	と(開脚)箱	4段 できない	0	0	0	0	0
不完全	3.0			0	2.4	0	0	8.3	
できる	12.8			0	7.1	13.8	14.3	33.4	
5段 不完全	0			0	0	0	0	0	
できる	72.2			64.0	81.0	86.2	85.7	50.0	
6段 不完全	0.8			0	0	0	0	0	
と(閉脚)箱	できる		8.4	36.0	9.5	0	0	8.3	
	3段 できない		1.5	0	0	0	0	8.3	
	不完全		2.3	0	0	0	0	8.3	
	できる		0.7	0	0	0	0	0	
	4段 不完全		1.5	0	0	0	0	0	
	できる		5.3	0	2.4	3.5	0	8.3	
陸上運動	ハードル	A	34.6	32.0	40.5	24.2	50.6	25.0	
		B	36.1	48.0	40.5	37.9	28.6	25.0	
		C	29.3	20.0	19.0	37.9	21.4	50.0	
	走り高とび	1 0 0 cm	41.4	40.0	26.2	44.8	42.9	58.3	
		1 1 0 cm	20.3	20.0	23.8	17.2	14.3	25.0	
		1 2 0 cm	15.0	20.0	19.1	10.4	28.5	0	
		1 3 0 cm	23.3	20.0	30.9	27.6	14.3	16.7	
	ボール運動	的あて	2回ともどかない	3.0	0	0	0	7.2	8.3
			1回とどいた	3.8	0	0	0	0	16.7
			2回ともあたらない	33.1	32.0	40.5	20.7	50.0	33.3
			1回あたり、1回とどかない	0.7	0	0	0	0	0
			1回あたり、1回あたらない	34.6	40.0	30.9	55.2	21.4	16.7
2回ともあたり			24.8	28.0	28.6	24.1	21.4	25.0	
インステップキック		2回ともどかない	3.0	0	4.8	0	0	0	
		1回とどいた	4.5	0	0	6.9	7.1	8.3	
		2回ともどかない	15.8	8.0	16.7	13.8	7.1	25.0	
		1回オーバー、1回とどかない	0.8	0	0	0	0	8.3	
		1回オーバー、1回とどいた	35.3	36.0	33.3	34.5	50.0	41.7	
		2回ともオーバー	40.6	56.0	45.2	44.8	35.7	16.7	

表-6 女子の領域別運動技能 (%)

領域	項目	年令 評価	全体 人員	年令					
				21	22~23	24~25	26~27	28~30	
器械	鉄(さか上がり)棒	片足できない	19.0	4.3	19.1	22.2	21.7	40.0	
		不完全	24.0	30.4	25.0	22.2	17.4	40.0	
		片足できる	41.4	43.6	33.8	48.2	47.9	0	
		両足不完全	6.7	8.7	7.4	5.5	8.7	0	
		両足できる	8.9	13.0	14.7	1.9	4.3	20.0	
		マ(前転)	できない	0.6	0	0	1.9	0	0
	マ(後転)	不完全	10.0	4.3	7.4	9.2	17.4	0	
		できる	89.4	95.7	92.6	88.9	82.6	100.0	
		できない	9.5	8.7	4.4	11.1	17.4	20.0	
		不完全	24.6	21.7	22.1	25.9	26.1	60.0	
		できる	65.9	69.6	73.5	63.0	56.5	20.0	
		運動	と(開脚)箱	4段 できない	14.5	0	18.7	16.7	26.1
不完全	6.2			8.7	7.4	3.7	4.3	0	
できる	26.8			21.7	32.3	29.6	13.0	0	
5段 不完全	3.9			13.0	1.5	3.7	4.3	0	
できる	39.1			47.9	38.2	35.2	43.6	40.0	
6段 不完全	1.1			0	1.5	1.9	0	0	
と(閉脚)箱	できる		8.4	8.7	7.4	9.2	8.7	20.0	
	3段 できない		9.5	0	10.3	14.8	8.7	0	
	不完全		1.7	0	2.9	1.9	0	0	
	できる		17.4	26.1	13.2	18.5	17.4	20.0	
	4段 不完全		12.8	4.3	16.2	12.9	17.4	0	
	できる		29.9	39.2	30.9	25.9	13.0	40.0	
陸上運動	ハードル	A	19.0	34.8	22.1	9.3	21.7	0	
		B	33.0	30.4	33.8	35.2	30.4	20.0	
		C	48.0	34.8	44.1	55.5	47.9	80.0	
	走り高とび	9 0 cm	72.6	78.3	73.5	70.4	69.6	100.0	
		1 0 0 cm	16.2	13.0	14.7	22.2	17.4	0	
		1 1 0 cm	7.8	8.7	7.4	5.5	8.7	0	
		1 2 0 cm	3.4	0	4.4	1.9	4.3	0	
	ボール運動	的あて	2回ともどかない	57.0	52.2	57.4	59.3	47.9	80.0
			1回とどいた	16.7	21.7	17.6	18.5	13.0	0
			2回ともあたらない	13.4	17.4	14.7	9.3	21.7	0
			1回あたり、1回とどかない	0	0	0	0	0	0
			1回あたり、1回あたらない	7.3	8.7	5.9	5.5	13.0	20.0
2回ともあたり			5.6	0	4.4	7.4	4.3	0	
インステップキック		2回ともどかない	7.8	8.7	2.9	9.3	8.7	40.0	
		1回とどいた	12.3	8.7	16.2	7.4	13.0	0	
		2回ともどかない	21.2	39.2	23.5	18.5	13.0	0	
		1回オーバー、1回とどかない	5.6	13.0	2.9	5.5	8.7	0	
		1回オーバー、1回とどいた	22.4	13.0	19.1	29.6	30.4	0	
		2回ともオーバー	30.7	17.4	35.3	29.6	26.1	60.0	

〔器械運動〕マット運動の前転では、僅かながらできない者もいるが、ほぼ男子、女子教員の全員ができる。しかし、後転になると「できない」は男子3.8%、女子9.5%であり、「不完全」は男子12.8%、女子24.6%と前転よりも高い比率を示し、助教諭にとって後転は前転よりも技能の難しいことを表わしている。これを年齢別に調べてみると、男子では「できない」、「不完全」とも26~27才、28~30才、31~39才の年齢層に集中し、加令に伴ない、その比率が高くなる傾向を示していた。女子ではどの年齢層にも「できない」、「不完全」はおり、この点で男子と異なるが、ほぼ加令に伴ない、その比率が高くなる傾向を示していた。鉄棒運動のさか上がりでは、片足踏み切りのさか上がりで、「できない」あるいは「不完全」は男子の7.5%に対し、女子が43.0%と女子の方がかなり技能が低い。年齢別では男子は28~30才が最も技能の低い結果となり、次いで22~23才であった。女子では片足踏み切りのさか上がりで「できない」は21才が4.3%、22~23才が19.1%、24~25才が22.2%、26~27才が21.7%、28~30才が40.0%と加令に伴ない増加の傾向を示していた。とび箱運動の腕立て開脚とび5段以上を「とべる」は男子の83.5%に対し、女子は48.6%であり、腕立て開脚とびでは、4段以上を「とべる」は男子の94.0%に対し、女子は60.1%と女子の方がとび箱運動の技能が低い。これは女子教員の筋力不足や技術的欠陥、あるいは恐怖心などの何らかの心理的要因によりあらわれたものと思われる。年齢別では男子は腕立て開脚とび、腕立て開脚とびともに加令に伴ない「とべる」の比率が低くなる傾向を示しているが、女子では年齢間の差異はほとんどみられなかった。

〔陸上運動〕障害走（ハードル）ではCランクのものは男子が29.3%に対し、女子は48.0%もあり、女子の方が技能が低い。年齢別では、男子は年齢間の差異はあまりみられないのに対し、女子は加令に伴ない技能が低下する傾向を示していた。走り高とびでは、男子は100cmしかとべなかった者は41.4%もあり、これを年齢別にみると、24~25才を除いては各年齢層とも4割以上もあり、100cmの高さが小学校6年生の男子の目標程度であるとして推察するならば、対象者が22~25才が全体の半数以上を占めるという比較的若い年齢構成にあり、また教員の方が児童よりも一般的に形態が大きく、体力が優れていることから考えて、低い記録であるといつてよいであろう。女子は90cmしかとべなかった者は72.6%あり、特に28~30才にその比率が高かった。90cmの高さは小学校5年生女子の目標程度であるとして推察するならば、女子教員はそれ程、低い記録であるとはいえないであろう。

〔ボール運動〕ソフトボールを用いての20mの距離からの的あてでは、男子は20mの距離を投げられなかった、投能力の劣っている者、すなわち「2回とも、とどかない」は28~30才、そして31~39才に僅かながらみられた。この技能テストは的に正確にあてるといふ技能であるが、「2回とも、あたり」は各年齢層とも21.4~28.6%の範囲であった。また「1回あたり、1回あたらない」を「2回とも、あたり」と含めて考えると、26~27才を除いては、加令に伴ないその比率が低くなる傾向を示していた。女子では20mの距離から「2回とも、とどかない」は各年齢層とも半数近くか、それ以上もあり、女子教員の投能力の低さをはっきり示したものと考えてよいであろう。しかしながら、本研究では正確な的あてをみるテストであったが、上記の結果から考えると、20mからの投球は女子教員にとってその距離が遠すぎると思われるので、今後この点を検討していくべきと考える。サッカーボールを用いてのインステップ・キックは男子は15mの距離を、女子は10mの距離を「1回オーバー」あるいは「2回ともオーバー」を含めて考えると、男子では76.7%、女子では58.6%と、男子、女子教員とも投能力よりはキック能力の方が優れているのではないかとと思われる。

以上の結果を簡単にまとめると、女子教員の方が男子教員よりも各運動領域とも、技能の低いことが認められ特に器械運動に顕著であった。またボール運動の的あてにおいても投能力の低さが認められた。体力・運動能力と年齢との関係については、調査段階にあり標本が少なく、今回は相関係数などを算出してないことから、今後の研究に待つべきところが多く断定はできないが、男子教員において加令に伴ない低下するような傾向がみられた。

2. 教科に対する意識

(1) 小学校8教科に対する意識

まず本題に入る前に、極めて曖昧で直感的な質問であるが、小学校8教科からみた教科体育の位置づけを知るために、教科別の「好き・嫌い」について質問した。この質問は非常に広い意味を持ち、本人が指導することを含めて、本人も行なうのが好きか嫌いかというニュアンスも含まれ、また過去の自分が受けてきたところの教科への印象、さらには本人の興味や関心などを表わすものと思われる。表-7、表-8は小学校8教科の好き・嫌いについて調べたものである。

表-7からわかるように、助教諭295名中、半数以上が「好き」と答えた教科は国語、社会、算数、図

表一 7 助教諭における小学校 8 教科の好き・嫌いの順位

程度	順位 教科	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
		算数	体育	国語	図工	社会	音楽	理科	家庭
好 き		69.8	57.6	56.3	50.8	50.2	36.6	30.5	22.4
普 通		21.7	33.2	34.2	38.6	40.3	31.2	47.5	40.3
嫌 い		8.1	8.8	8.8	8.8	9.2	27.8	21.4	25.8
無記・不明		0.4	0.4	0.7	1.8	0.3	4.4	0.6	11.5

表一 8 小学校 8 教科の男女別好き・嫌いの順位

程度	性別 順位 教科	男 子							
		1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
		体育	算数	社会	国語	図工	理科	音楽	家庭
好 き		76.2	72.1	70.5	50.8	48.4	30.3	25.4	9.0
普 通		20.5	20.5	23.8	40.2	36.1	50.8	30.3	31.1
嫌 い		3.3	7.4	5.7	9.0	13.9	18.9	36.9	41.0
無記・不明		0	0	0	0	1.6	0	7.4	18.9

程度	性別 順位 教科	女 子							
		1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
		算数	国語	図工	体育	音楽	社会	家庭	理科
好 き		68.2	60.1	52.6	44.5	44.5	35.8	31.8	30.6
普 通		22.5	30.1	40.5	44.2	31.8	52.0	46.8	45.1
嫌 い		8.7	8.7	5.2	12.7	21.4	11.6	15.2	23.1
無記・不明		0.6	1.1	1.7	0.6	2.3	0.6	6.4	1.2

工、体育の5教科である。この中でも一番高い比率を示した教科は算数であり、助教諭の69.8%が「好き」であると、次いで体育の57.6%、国語の56.3%であり、助教諭は算数、体育、国語を好きな教科と考えている。男女別みると、男子教員では体育が「好き」が76.2%と一番高い比率を示し、次いで算数の72.1%、社会の70.5%となっている。女子教員では算数の68.2%が一番高く、次いで国語の60.1%、図工の52.6%、そして体育の44.5%と続き、男子教員が体育を好きな教科と考えているのに対し、女子教員は好きでも嫌いでもない教科と考えている。したがって、体育の好き・嫌いの意識には顕著な性差がみられた。

さきと同じ質問をさらに一歩進めて、「指導しやすいか・しにくいか」と具体的に質問したところ表一 9、表一 10の如き結果を得た。この質問は教科の指導内容、指導方法、技能の有無などが考慮されたために、先の「好き・嫌い」の質問に比べ、比率に相当の変動がみられた。すなわち、客観的に答えを出せて、すっきりとした指導ができる算数は「好き」の69.8%に加えて、約10%増の79.7%が「指導しやすい」と答えている。またあとの7教科においてはほとんど「普通」とする群や「しにくい」とする群が増え、国語などは逆に音楽に次いで指導しにくい教科となっている。しかし、体育は指導しやすいと

された算数に次いで、比較的指導しやすい教科と考えられている。

表一 9 助教諭における小学校教材 8 教科の指導のしやすさ・しにくさの順位

程度	順位 教科	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
		算数	体育	図工	理科	社会	国語	家庭	音楽
し や す い		79.7	44.1	34.3	28.9	27.0	27.0	20.0	19.6
普 通		16.7	37.7	40.5	36.6	34.5	32.8	45.1	28.3
し に く い		3.6	18.2	25.2	34.5	38.5	40.2	34.9	52.1

表一 10 小学校教材 8 教科の指導のしやすさ・しにくさの順位

程度	性別 順位 教科	男 子							
		1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
		算数	体育	社会	図工	理科	国語	家庭	音楽
し や す い		74.2	55.8	40.0	33.1	26.7	26.7	6.2	7.2
普 通		20.0	35.0	30.0	38.1	35.0	30.0	35.8	25.8
し に く い		5.8	9.2	30.0	28.8	38.3	43.3	58.0	67.0

程度	性別 順位 教科	女 子							
		1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
		算数	図工	体育	家庭	理科	国語	音楽	社会
し や す い		83.8	35.3	35.4	29.8	30.7	27.3	28.0	17.1
普 通		14.3	42.3	39.8	51.8	37.9	34.8	30.1	38.0
し に く い		1.9	22.4	24.8	18.4	31.4	37.9	41.9	44.9

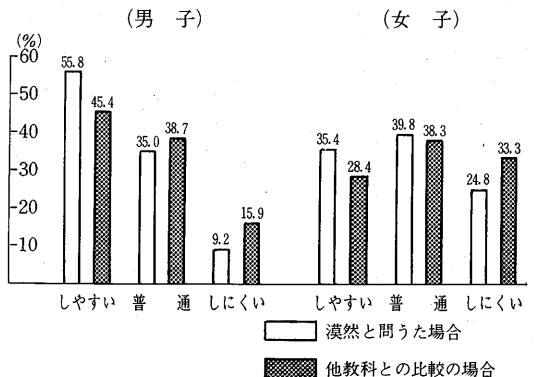
(2) 教科体育に対する意識

(a) 教科体育の指導の難易性について

さきに小学校 8教科の指導の難易性について質問したが、さらにここでは、「体育は他教科と比較して指導しやすいか否か」を質問したところ、図一 4のような結果を得た。図一 4の漠然と質問した場合は、さきの表一 10の小学校 8教科の指導の難易性を調べた際の体育の比率である。

図一 4からわかるように、女子教員の方が男子教員より

図一 4 体育指導のしやすさ・しにくさ



りも指導を苦手としている。また漠然と質問した場合と他教科との比較の場合では、男子、女子教員ともに指導のしやすさ・しにくさの比率に変動がみられた。すなわち、他教科と比較した場合には漠然と質問した場合に比べ「指導しやすい」とする群が減って、「指導しにくい」とする群が増えている。以上のように比率に変動がみられたのは、何によるものであるかを確かめるために、さらに「体育の指導しにくい」理由について質問した。

表一11は教科体育の指導しにくい理由を男女別に調べたものである。男子教員では「できる子とできない子の取り扱いが難しい」が圧倒的に多く、「運動技能に自信がない」、「指導内容が多すぎる」、「指導方法がわからない」という理由を多く回答している。女子教員では「運動技能に自信がない」、「指導方法がわからない」が圧倒的に多く、次いで「できる子とできない子の取り扱いが難しい」、「子どもが解放的となり、その管理が難しい」という理由を多く回答し、指導しにくい理由には若干の性差がみられた。

表一11 体育の指導しにくい理由 (%)

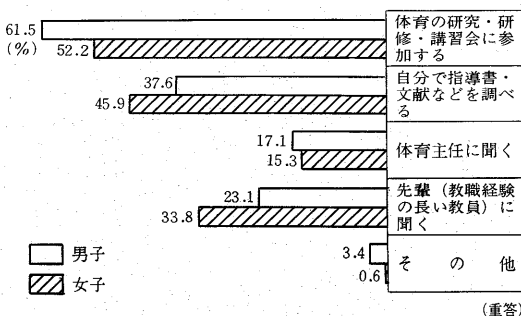
理由	男子	女子
(ア) 運動技能に自信がない	36.8	44.4
(イ) 指導方法がわからない	26.3	42.6
(ウ) 体力を要する	5.3	1.9
(エ) できる子とできない子の取り扱いが難しい	47.4	25.9
(オ) 子どもが解放的となり、その管理が難しい	15.8	24.1
(カ) 指導内容が多すぎる	26.3	5.6
(キ) 危険が伴う	5.6	9.3
(ク) その他	5.3	1.9

(重答)

図一5は「体育の指導力をつける方法として、どのようにしているか」について調べたものである。この質問は体育の指導しにくい対策として、助教諭がどのようにしているかということであるが、全体的には体育の研究會などへの参加によることが多く、また他人(体育主任や教職経験の長い教員)から教えてもらったり、自分で指導書や文献などを調べるという方法をよく利用してい

る。

図一5 体育の指導力をつける方法



(重答)

「経験年数別の体育の指導のしやすさ・しにくさ」 (%)

難易度	1年未満		1年以上		2年以上		3年以上	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
しやすい	33.3	26.2	55.1	28.3	46.1	25.0	77.8	0
普通	48.2	34.5	34.5	41.3	38.5	50.0	11.1	75.0
しにくい	18.5	39.3	10.4	30.4	15.4	25.0	11.1	25.0

(b) 教科体育の各運動領域別指導の難易性について

教科体育の運動領域は体操、器械運動、陸上運動、ボール運動、水泳、ダンスの6領域からなっているが、助教諭の各運動領域別指導の難易性についても調べたところ、表一12の如き結果を得た。

まず全体的傾向であるが表一12で示すように、運動種目6領域中「指導しやすい」の比率が最も高いのは、ボール運動の74.3%であり、次いで体操の53.2%、そして陸上運動の52.3%である。他の3領域はいずれも助教諭の半数以上の者が「指導しやすい」と考え、また「指導しにくい」と考える者も他領域に比べ少なく、その比率は5.7~11.4%の範囲にあり、指導しやすい領域であると考えている。この3領域の運動種目の中でダンスは「指導しにくい」とする比率が56.9%と最も高く、「指導しやすい」とするものも15.1%と相当に低い比率を示し、他領域との間に顕著な差異がみられた。

以上、全体的傾向について述べてきたが、ここではさらに表一13の如く男女別・担当学年別に各運動領域別の指導の難易性について調べた。本研究においては未だ積み重ねて調査している段階であり、特に担当学年別指導

表一12 体育の各運動領域別指導のしやすさ・しにくさ (%)

難易度	①体 操			②器 械			③陸 上 運 動			④ボ ー ル 運 動			⑤水 泳			⑥ダ ン ス		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
しやすい	53.2	51.7	54.4	36.4	43.3	31.2	52.5	64.2	43.8	74.3	77.5	71.9	31.4	41.7	23.7	15.1	2.5	24.5
普通	35.4	38.3	33.1	34.7	35.0	34.4	37.1	32.5	40.6	20.0	16.7	22.5	36.4	39.2	34.4	28.0	16.7	36.5
しにくい	11.4	10.0	12.5	28.9	21.7	34.4	10.4	3.3	15.6	5.7	5.8	5.6	32.2	19.2	41.9	56.9	80.8	39.0

表-13 担当学年別の各運動領域別指導のしやすさ・しにくさ

(%)

領域 性別 学年 難易度	① 体 操						② 器 械 運 動						③ 陸 上 運 動					
	男 子			女 子			男 子			女 子			男 子			女 子		
	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高
しやすい	33.4	57.9	45.4	47.1	58.7	65.0	33.3	49.1	40.9	39.7	23.9	30.0	58.4	64.9	68.2	50.0	43.5	45.0
普通	33.3	38.6	43.2	42.6	26.1	25.0	8.3	38.6	40.9	30.9	45.7	35.0	33.3	31.6	29.5	36.8	43.5	30.0
しにくい	33.3	3.5	11.4	10.3	15.2	10.0	58.4	12.3	18.2	29.4	30.4	35.0	8.3	3.5	2.3	13.2	13.0	25.0

領域 性別 学年 難易度	④ ボ ー ル 運 動						⑤ 水 泳						⑥ ダ ン ス					
	男 子			女 子			男 子			女 子			男 子			女 子		
	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高
しやすい	50.0	78.9	84.1	70.6	78.3	65.0	50.0	33.3	52.3	17.6	23.9	25.0	0	3.5	2.3	23.9	19.6	25.0
普通	33.3	14.1	13.6	25.0	17.4	30.0	33.3	47.4	31.8	36.8	37.0	35.0	16.7	14.0	18.2	37.3	37.0	30.0
しにくい	16.7	7.0	2.3	4.4	4.3	5.0	16.7	19.3	15.9	45.6	39.0	40.0	83.3	82.5	79.5	38.8	43.4	45.0

の難易性については、標本が少数であり、学年間の標本にもアンバランスがあり、断定はできかねるので、今後の課題としながらも、ここでは傾向についてということとどめておきたい。

〔体操〕男子、女子教員ともに、指導しやすい領域と考えている。担当学年別については若干の性差がみられるが、男子、女子教員とも、低学年担当よりは中・高学年担当の方が指導しやすいとする者が多い。

〔器械運動〕女子教員の方が指導を苦手としている。担当学年別については男子教員は低学年担当よりは中・高学年担当の方が指導しやすいとする者が多いのに対し、女子教員は低学年担当の方が指導しやすいと考える者が多い。先に表-5、表-6で示した運動技能テストの結果、鉄棒の片足踏み切りのさか上がりで男子の1.5%できないのに対し、女子では19%もできない者がいる。またとび箱運動の腕立て閉脚とびの4段をとべない者、男子4.5%に対し、女子では29.1%もあり、女子教員の鉄棒、とび箱運動における技能の低いことが認められ、さきの体育の指導しにくい理由のところで、女子教員は「運動技能に自信がない」を最も多くあげていたが、このことが指導のしにくさに大きく関連しているものと思われる。

〔陸上運動〕顕著な性差がみられ、女子教員の方が指導を苦手としている。担当学年別については、男子教員は高学年担当に指導しやすいと考える者が多いのに対し、女子教員は低学年担当に多い。以上のような性差がみられたが、男子教員では「指導しにくい」の比率が最も低いのは陸上運動であり、女子教員でもボール運動、体操に次いで陸上運動が低く、助教諭にとって陸上運動は指導しやすい領域であると考えられているようである。一般的に小学校児童より形態が大きく体力の優れている教員にとっては、陸上運動を素朴に捉えるならば指導しや

すいという意識が高くなるであろうが、体育を専門にやっている者にとっては陸上運動では「如何に児童の記録を伸ばし、能力を最大限に引き出すか」に指導の難しさがあり、我々の考える意識と助教諭の意識とにギャップがみられた。

〔ボール運動〕男子、女子教員ともに運動種目6領域中、ボール運動を最も指導しやすい領域と考え、性差はほとんどみられなかった。特に女子教員では体育を指導しにくいと考える者が全体の3割を占めていたのにも拘らず、ボール運動では指導しにくいのは僅か5.6%しかおらず、他領域に比べボール運動の指導のしやすさをあらわしている。ボール運動は児童の集団活動に対する欲求を満たすことのできる絶好な教材であり、ルールを熟知しておれば比較的活発に児童が活動することができることから、助教諭はボール運動を最も指導しやすい領域であると考えたのであろうと思われる。しかしながら、ボール運動では戦法的に集団技術の指導に難しさがあるが、この点で我々の考える意識と助教諭の意識とにギャップがみられた。担当学年別については、男子教員は学年が進むにつれ指導しやすいと考える者が多くなるが、女子教員では中学年担当に多い。

〔水泳〕「指導しにくい」は男子19.2%に対し、女子は6領域中、最も比率が高く41.9%であり、女子教員は他領域に比べ水泳を相当苦手としている。本研究において泳げる程度についても質問したところ、表-14の如き結果を得た。

表-14 クロール・平泳ぎの泳げる程度 (%)

程度	泳法 性別	クロール		平泳ぎ	
		男子	女子	男子	女子
泳 げ る		91.8	60.7	90.2	50.3
全 然 泳 げ ない		8.2	39.3	9.8	49.7

男子の「全然泳げない」とする者が8.2~9.8%であるのに対し、女子では39.3~49.7%であり、女子教員は泳げないことの自信のなさから指導を苦手としているものと思われる。担当学年別については、男子教員は中学年担当に、女子教員は低学年担当に指導しにくいと考える者が多い。

〔ダンス〕男子では「指導しやすい」は2.5%と極めて低い比率であり、「指導しにくい」も80.8%と高い比率を示し、他領域との間に顕著な差異がみられ、6領域中、最も指導を苦手とし、顕著な性差がみられた領域である。女子教員では水泳とほぼ同じ程度の指導の難易性であり、女子教員でさえ相当苦手としている。

(c) 教科体育の授業運営について

助教諭が体育の授業において、如何なる意識をもって指導しているか、手近なところから「体育の授業における指導の留意点」について質問したところ、表-15の如き結果を得た。

体育の指導では本来、体力・技能・態度・安全の4つの側面を各々、学年や領域と関連づけて捉えていくべきであるが、今回は単に授業に対する留意点として質問したところ、男子教員は比較的「体力」、「安全」が高く、次いで「態度」、「技能」の順序となり、4つの側面の各比率に差がみられた。女子教員は男子教員ほど大きな差

表-15 授業中の指導の留意点 (%)

側面	男 子				女 子			
	全体	学 年 別			全体	学 年 別		
		低	中	高		低	中	高
体 力	36.2	37.5	30.6	41.8	23.1	25.8	18.3	30.8
技 能	12.5	15.7	11.3	16.4	20.7	14.6	16.6	26.9
態 度	20.7	15.7	30.6	14.5	28.6	32.6	33.4	23.1
安 全	30.6	31.2	27.5	27.3	27.6	27.0	31.7	19.2

表-16 授 業 中 の 示 範 (%)

項 目	全 体	男	女	担 当 学 年 別								
				低 学 年			中 学 年			高 学 年		
				男	女	0	男	女	0	男	女	0
よ く 行 う	41.9	57.1	30.4	37.5	66.7	32.4	47.1	59.6	31.1	46.9	56.8	25.0
時 々 行 う	56.3	42.0	67.1	62.5	33.3	67.6	52.9	40.4	68.9	48.4	40.9	65.0
行 わ な い	1.8	0.8	2.5	0	0	0	0	0	0	6.3	2.3	10.0

表-18 体育の授業の自主的活動への振り替え (%)

項 目	全 体	男	女	担 当 学 年 別								
				低 学 年			中 学 年			高 学 年		
				男	女	0	男	女	0	男	女	0
よ く あ る	1.8	3.4	0.6	0	0	0	3.0	5.4	0	1.6	2.3	0
時 々 あ る	10.2	12.0	8.9	6.3	0	7.4	6.3	10.7	2.2	15.9	16.3	15.0
な い	88.0	84.6	90.4	93.7	100	92.6	90.1	83.9	97.8	82.5	81.4	85.0

はみられず、「態度」、「安全」と並び、次いで「体力」、「技能」の順に多く回答している。これをさらに、担当学年別についてみると、男子は各学年とも比較的「体力」に重点をおいて指導しているのに対し、女子の低・中学年担当は「態度」に、高学年担当は「体力」に各々重点をおいて指導している。全体的にみて、特に女子教員の「態度」に対する重点のおき方が高いという根拠には、体力と技能の実態調査の結果から「女子教員は運動技能が劣る傾向にある」といわれ、このことが女子教員の意識に影響を及ぼしているものと思われる。また、この点については、表-16の「授業中の示範」とあわせて考えると一層明確となる。すなわち、授業中の示範は「よく行なう」とする者、男子57.1%に対し、女子30.4%であり、女子教員の方が消極的であるといえる。女子の担当学年別については、低・中学年担当よりは高学年担当に消極的な傾向が強く、「行わない」とする者は10%もあり、高学年の技能に対して自信がなく、示範をためらう者がいると推察され、技能の有無が示範の行ない方に影響を及ぼしていると思われる。「示範」は「技能」を示すことだけでは限らないが、授業中の示範の行ない方には顕著な性差がみられた。

授業運営について、さらに「授業中の準備・整理運動の行ない方」、「体育の授業を児童の自主的活動にしたことがあるか」、「体育の授業の他授業への振り替え」、「授業中の見学者の取り扱い方」などについても調べ、表-17から表-20の如き結果を得た。

表-17 授業中の準備・整理運動 (%)

項 目	全 体	男	女
し て い る	97.5	95.8	98.8
し て い な い	2.5	4.2	1.2

表-19 体育の授業の他授業への振り替え(雨天の場合は除く)

(%)

項目	全体	男	女	担 当 学 年 別					
				低 学 年		中 学 年		高 学 年	
よくある	0.7	0	1.2	0	0	0	0	1.6	0
時々ある	37.1	34.7	38.9	46.3	33.3	37.3	41.1	29.6	27.3
ない	62.2	65.3	59.9	53.7	48.5	62.7	32.6	68.8	35.0
					66.7		58.9		72.7
					51.5		67.4		60.0

表-20 授業中の見学者の取り扱い方

(%)

項目	全体	男	女	担 当 学 年 別					
				低 学 年		中 学 年		高 学 年	
着換えさせないで、授業に出させ、見学させる。	63.5	66.7	61.1	69.5	100	61.2	59.6	70.3	68.9
着換えさせて、できるだけ補助やアドバイスをなどさせてなるべく参加させる	23.8	24.2	23.5	18.3	0	23.3	26.3	23.4	26.7
教室に残させる	7.4	5.8	8.6	7.3	0	9.7	10.5	1.6	0
その他	5.3	3.3	6.8	0	9.4	5.8	8.7	4.7	5.3

は表-17のとおりであるが、助教諭はほとんど全員が自分で指導している。

表-18の「体育の授業を児童の自主的活動の場にしたことがあるか」は「よくある」「時々ある」を含めて考えると、助教諭の12%が「ある」と答えており、男子の方が若干多い。担当学年別については、学年が進むにつれ「ある」が多くなる傾向にあり、これを逆に言い換えるならば、学年が低いほど「ない」とする者が多くなるということであり、児童の年齢から教員の関与すべき点を考慮すれば、当然の結果であると思われる。

表-19の「体育の授業を他授業へ振り替えたことがあるか」の質問に対して、「よくある」または「時々ある」とした助教諭は37.8%もあり、かなり高い比率を示している。特に低学年担当の教員に顕著であり、46.3%にもぼっている。また中学年担当は37.3%、高学年担当は29.6%と学年が低いほど多くみられ、どちらかといえば、女子教員にその傾向がみられた。

表-20の「授業中の見学者の取り扱い方はどのようにしているか」の質問に対しては、「着換えしないで、授業を見学させる」が一番多く、63.5%。次いで「着換えさせ、できるだけ補助やアドバイスなどさせて、なるべく参加させる」は23.8%であり、助教諭のほとんどの者ができるだけ授業に参加させるという形をとっており、見学者も学習のうちであるという配慮がなされているものと思われる。

体育の授業運営とは直接のかかわりは薄いですが、指導以前の問題として、助教諭の姿勢にかかわると思われる次のような質問をした。表-21は「体育の授業時に運動着(体操着)に着換えずに指導したことがあるか」の質問に対しての結果であるが、助教諭の8.3%が「ある」とし

ている。

表-21 運動着に着換えしないで体育の授業を指導したもの

(%)

項目	全体	男	女
あ	8.3	9.2	7.5
ない	91.7	90.8	93.7

(3) 教科外時間における指導について

小学校学習指導要領によれば「健康で安全な生活を営むのに必要な習慣や態度を養い、心身の調和的発達を図るため、体育に関する指導は学校の教育活動全体を通じて適切に行なうものとする。特に体力の向上については、体育科の時間はもちろん、特別活動においても、じゅうぶん指導するよう配慮しなければならない」とされ、余裕時間を生み出して、業間体育や児童が伸々と活発に活動できる場を配慮するなど、体育に関する指導の充実について明示している。したがって、教科体育と教科外活動は極めて密接な関連を持っているといえる。このような理由から体育の授業以外のものとして「業間体育の実施」についても質問し、表-22、表-23の如き結果を得た。

業間体育を「行なっている」は助教諭の30.2%であり、その行ない方は主として「学校全体で」行なっており、同時に「各学級で」も行なっている。

教師が教科外、すなわち、休み時間や放課後、または特別活動の時間に子どもと遊んだり、クラブ活動に参加することは、子どもの個性を伸ばしたり、性格をつかむ上で、また子どもとの親密感を得る上で、必要欠くべからざる教育的配慮であると思われるが、この点についても質問したところ、表-24および表-25の如き結果を得た。

表-22 業間体育の実施

(%)

項目	全体	男	女	担 当 学 年 別								
				低 学 年		中 学 年		高 学 年				
行っている	30.2	28.9	31.2	35.0	男	16.7	32.7	男	38.5	23.8	男	25.0
					女	38.2		女	25.0		女	21.1
時々行っている	25.2	27.3	23.6	27.5	男	25.0	22.8	男	24.6	30.2	男	31.8
					女	27.9		女	20.5		女	26.3
行っていない	44.6	43.8	45.2	37.5	男	58.3	44.6	男	36.8	46.0	男	43.2
					女	33.8		女	54.5		女	52.6

表-23 業間体育の実施方法

(%)

項目	全体	男	女	担 当 学 年 別								
				低 学 年		中 学 年		高 学 年				
学校全体で	81.0	71.4	87.8	82.1	男	50.0	81.8	男	77.3	80.0	男	63.6
					女	80.8		女	90.9		女	100
学年で	2.4	2.9	2.0	3.6	男	0	3.0	男	9.1	0	男	0
					女	3.8		女	0		女	0
学級で	42.9	42.9	42.9	42.9	男	50.0	36.4	男	22.7	66.7	男	81.8
					女	42.3		女	63.6		女	25.0

(重答)

表-24 教科外の子どもの遊びの割合

(%)

項目	全体	男	女	担 当 学 年 別								
				低 学 年		中 学 年		高 学 年				
よく遊ぶ	42.4	57.0	32.0	35.0	男	50.0	54.5	男	62.5	38.5	男	52.3
					女	32.4		女	43.2		女	9.5
時々遊ぶ	53.1	42.1	60.9	61.2	男	50.0	44.1	男	37.5	58.4	男	45.5
					女	63.2		女	52.3		女	85.7
遊ばない	4.5	0.8	7.1	3.8	男	0	2.4	男	0	3.1	男	2.3
					女	4.4		女	4.5		女	4.8

表-25 クラブ活動(体育クラブ)の指導

(%)

項目	全体	男	女	担 当 学 年 別								
				低 学 年		中 学 年		高 学 年				
している	58.4	74.4	47.1	46.2	男	75.0	60.8	男	70.2	75.0	男	79.1
					女	41.2		女	48.9		女	66.7
していない	41.6	25.6	52.9	53.8	男	25.0	39.2	男	29.8	25.0	男	20.9
					女	58.8		女	51.1		女	33.3

表-24は「教科外に子どもと一緒に遊ぶかどうか」の調査結果であるが、男子教員の「よく遊ぶ」とする者が57.0%であるのに対し、女子教員は32.0%で、男子教員よりも子どもとの接触の割合が少ないといえる。担当学年別にみても、さきの結果と同様に、女子教員の方が子どもとの接触の割合が少なく、また男子教員は各学年間に大きな差異がみられないのに対し、女子教員は低・中学年担当では32.4~43.2%、高学年担当では9.5%で、高学年担当はその比率に顕著な減少がみられ、子どもとの接触の割合が他学年担当よりも少ない。その理由としてここには示していないが、「雑務に追われて時間的余裕がない」が一番多く、次いで「次の時間の準備のため」、「休息のため」の順に多く回答している。

表-25の体育クラブの指導については「指導している」が男子74.4%に対し、女子は47.1%と男子よりも低い比率を示している。女子教員の場合は文化クラブを指導する者が多いと思われるが、体育クラブについては、やはり男子教員に委ねられているケースが多いものと思われる。

以上、助教諭の教科外時間の過ごし方について調べてき

たが、遊びや体育クラブなどにおいて、子どもとの接触の割合は男子教員の方が女子教員よりも、行動面においてやや積極的であると思われる。

3. 体力・技能と教科に対する意識との関係

本研究では、指導上あるいは示範上、影響をもつと思われる敏捷性、柔軟性、瞬発力などをみるために反復横とび、立位体前屈、垂直とびの3項目を測定し、また最低この程度の運動技能を持っていないと指導上困るであろうという観点から、器械運動(前転、後転、さか上がり、腕立て開脚とび、腕立て閉脚とび)、陸上運動(50m走、走り高とび、障害走)、ボール運動(的あて、インステップ・キック)の3領域から各種の主観的・客観的な立場のテストを選定し実施した。さらに意識調査においては、教科に対する意識として、小学校8教科の指導の難易性および教科体育の運動領域別の指導の難易性、授業運営に関しては教員の指導力のつけ方や授業中の示範の有無など、教科外の過ごし方としては子どもとの遊びの割合やクラブ指導の有無などについて調査した。

表一 26 対象者の体力・技能

ここでは、以上の各項目について調査した 295 名の助教諭 (男子122名, 女子173名) の中から体力・技能に優れていると思われる者および劣っている者を抽出し、体力・技能のある・ないが教科体育にどのような意識となつてあらわれているかをみようとするものである。

体力・技能のある・ないは(1)体力 (2)器械運動 (3)陸上運動 (4)ボール運動の4項目に分類し、5段階評価法を用いて「4」、「5」を取った者を「合」とし、「1」、「2」を取った者を「不」とし、これらの4項目のすべてに「合」を取った者を体力・技能に優れていると思われるグループ (以下「優グループ」と略す) とし、また4項目のすべてに「不」を取った者を体力・技能に劣っていると思われるグループ (以下「劣グループ」と略す) とした。優グループの人数は男子11名, 女子21名の32名、劣グループは男子11名, 女子23名の34名である。

本来ならば、体力・技能は各々、切り離して区別して捉えるべきであり、体力面からまたは技能面から考察していくべきであると思われるが、ここでは次のような理由から、すなわち、対象者である助教諭の年齢構成が21~25才にほとんど集中しており、しかも本研究の測定項目も限定されていること、また50m走のように体力と技能にまたがる要因もあることから、ここでの体力の項目は普通のように考えず、一種の技能という見解をとっており、敢えて「体力・技能」という言葉を使っている。体育の指導の難易性について、我々が類別したところ

器	劣	前 転		後 転		さか上がり	開脚とび	閉脚とび
		男	女	男	女	2人	1(4段)	2(4段)
できない	男	1人	4人	2人	13人	11人	18人	
	女	5人	5人	2人	3人	1人		
不完全	男	3人	5人	2人	3人	1人		
	女	6人	11人	5人	2人	1人		
械	優	前 転		後 転		さか上がり	開脚とび	閉脚とび
		男	女	男	女	10人	6(6段)	11(5段)
できる	男	11人	11人	10人				
	女	21人	21人					

陸上	50 m 走		走り高とび		障 害 走	
	優	劣	優	劣	優	劣
男	7.06	7.72	9人(130)	8人(110)	10人(A)	9人(C)
女	8.26	9.60	7人(120)	7人(90)	14人(A)	19人(C)

ボール	的 あ て		インステップキック	
	優	劣	優	劣
男	6人(1回)	3人(1回)	10人(2回)	1人(1回)
女	8人(2回)	19人(2回)	12人(2回)	6人(1回)
	あ た り	とどかない	オ ー バ ー	とどかない

体力	垂 直 と び		立位体前屈		反 復 横 と び	
	優	劣	優	劣	優	劣
男	59.6cm	47.7cm	6.9cm	42.07	32.4回	
女	44.6cm	32.0cm	11.2cm	43.55	31.8回	

の優劣グループ別にみると、表一28からわかるように、優グループでは、体育を指導「しやすい」と75.0%の者が考え、「しにくい」は僅か6%にすぎないのに対して、劣グループでは音楽、家庭に次いで、体育を指導しにくい教科と考え、45.5%が指導しにくいとしている。特に劣グループの女子に指導しにくいと考える者が多く、音楽とともに体育を最も指導しにくい教科としており、体力・技能のある・ないが大きな意識の差となつてあらわ

表一 27 グループ別の小学校 8 教科の好き・嫌い

性別	程度	教科グループ	国		語		社 会		算 数		理 科		音 楽		図 工		体 育		家 庭	
			優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣		
全体	好	き	50.0	51.3	40.6	42.9	53.1	74.3	15.6	42.9	43.8	40.0	40.6	37.1	87.5	29.4	31.3	11.4		
	普	通	40.6	37.1	34.4	42.9	48.8	14.3	56.3	37.1	37.5	22.9	53.1	48.6	12.5	50.0	37.5	45.7		
	嫌	い	9.4	8.6	25.0	14.2	3.1	11.4	28.1	20.0	18.7	37.1	6.3	14.3	0	20.6	31.2	42.9		
男子	好	き	36.4	36.4	81.8	54.5	63.6	72.7	9.1	36.4	18.2	27.3	36.4	36.4	81.8	54.5	18.2	0		
	普	通	63.6	45.5	9.1	27.3	36.4	18.2	72.7	45.5	54.5	18.2	63.6	36.4	18.2	45.5	18.2	18.2		
	嫌	い	0	18.1	9.1	18.1	0	9.1	18.2	18.1	27.3	54.5	0	27.2	0	0	63.6	81.8		
女子	好	き	57.2	60.9	19.1	39.1	47.6	78.2	19.1	45.9	57.2	45.9	42.9	39.1	90.5	17.4	38.1	17.4		
	普	通	28.5	34.8	47.6	52.2	47.6	13.4	47.6	33.3	28.5	25.0	47.6	56.5	9.5	52.2	47.6	60.8		
	嫌	い	14.3	4.3	33.3	8.7	4.8	13.4	33.3	20.8	14.3	29.1	9.5	4.4	0	30.4	14.3	21.8		

表一 28 グループ別の小学校 8 教科の指導のしやすさ・しにくさ

性別	難易度	教科グループ	国		語		社 会		算 数		理 科		音 楽		図 工		体 育		家 庭	
			優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣		
全体	しやすい		21.9	22.9	3.1	20.0	71.9	68.6	28.1	31.4	12.5	11.4	25.0	28.6	75.0	20.1	6.3	14.3		
	普通		25.0	34.3	40.6	40.0	25.0	20.0	25.0	37.2	37.5	25.7	46.9	31.4	18.8	31.4	28.1	28.6		
	しにくい		53.1	42.8	56.2	40.0	3.1	11.4	46.9	31.4	50.0	62.9	28.1	40.0	6.2	45.5	66.6	57.1		
男子	しやすい		36.4	18.2	9.1	45.4	72.7	54.5	27.3	36.4	9.1	0	9.1	36.3	81.8	36.3	0	0		
	普通		18.2	45.4	45.5	27.3	27.3	36.4	36.4	18.2	36.4	27.3	54.5	27.3	18.2	45.5	18.2	18.2		
	しにくい		45.4	36.4	45.4	27.3	0	9.1	36.4	45.4	54.5	72.7	36.4	36.4	0	18.2	81.8	81.8		
女子	しやすい		14.2	26.1	0	8.7	71.4	78.2	28.6	30.4	14.3	17.4	33.3	26.1	71.4	13.1	9.6	21.7		
	普通		28.6	30.4	38.1	47.8	23.8	13.1	19.0	47.8	38.1	21.7	42.9	34.8	19.0	26.0	33.3	34.8		
	しにくい		57.2	43.5	61.9	43.5	4.8	8.7	52.4	21.8	47.6	60.9	23.8	39.1	9.6	60.9	57.1	43.5		

表-29 グループ別の各運動領域別指導のしやすさ・しにくさ

性別	難易度	①体 操		②器械運動		③陸上運動		④ボール運動		⑤水 泳		⑥ダン ス	
		優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣	優	劣
全体	しやすい	59.4	40.0	62.5	11.8	53.1	37.2	68.8	61.7	31.2	14.2	15.6	20.6
	普通	34.4	40.0	31.3	44.1	46.9	31.4	28.1	23.6	50.0	42.9	34.4	20.6
	しにくい	6.2	20.0	6.2	44.1	0	31.4	3.1	14.7	18.8	42.9	50.0	58.8
男子	しやすい	63.5	27.3	81.8	8.2	72.7	45.5	72.7	45.5	36.4	27.3	0	9.1
	普通	27.3	63.6	18.2	54.5	27.3	45.5	27.3	45.5	54.5	45.4	27.3	0
	しにくい	9.2	9.1	0	27.3	0	9.0	0	9.0	9.1	27.3	72.7	90.9
女子	しやすい	57.1	47.8	52.3	8.7	42.9	34.8	66.7	69.6	28.6	8.3	23.8	26.1
	普通	38.1	30.4	38.1	39.1	57.1	25.0	28.6	13.0	47.6	41.7	38.1	30.4
	しにくい	4.8	21.8	9.6	52.2	0	40.2	4.7	17.4	23.8	50.0	38.1	43.5

れていることがわかった。そこで、「指導しにくい」と考えた者のその理由を調べると、劣グループでは「運動技能に自信がない」が最も多く、あとは「指導方法がわからない」、「できる子とできない子の取り扱いが難しい」、「子どもが解放的となり、その管理が難しい」という理由を多く回答している。

次に、どのような運動種目が指導しやすく、また、しにくいかをみるために、体育の各運動領域別指導の難易性について、優劣グループ別にみると表-29の如く、優グループでは比較的指導しやすい領域として、ボール運動、器械運動、体操、陸上運動をあげ、指導しにくい領域としてダンスをあげている。劣グループでは比較的指導しやすい領域としてボール運動をあげている以外は、あとは指導しやすいとは考えておらず、特に器械運動や水泳のように技能の有無、すなわち、「できる・できない」が明確にあらわれるものが指導しにくいと考えられている。たとえば、器械運動のマット、鉄棒、とび箱の技能テストにおいて劣グループでは後転のできない者が26.5%、さか上がりのできない者が44.1%、腕立て閉脚とび4段をとべない者が58.8%にものぼり、それに「不完全」を含めると後転は73.5%、さか上がりは64.7%、腕立て閉脚とびは64.7%となり、極めて技能の低いことがわかった。

体育の指導では、ある程度の技能を持ち、示範することがかなり重要になると思われるが、技能を持つ者は積極的に示範を行ない、技能を持たない者は示範に対して相当消極的になる傾向にある。表-30は授業中の示範について調べたものである。

表-30 グループ別の授業中の示範

程度	性別	全 体			優グループ			劣グループ		
		全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
よく行う		41.9	57.1	30.4	78.1	90.9	71.4	12.9	18.2	8.6
時々行う		56.3	42.1	67.1	21.9	9.1	28.6	77.4	81.8	65.2
行わない		1.8	0.8	2.5	0	0	0	9.7	0	26.2

優グループでは78.1%の者が「よく行なう」と答え、

残りの者は「時々行なう」と答えており、これを男女別にみると、男子教員の方が積極的に示範を行なっている。劣グループでは12.9%の者が「よく行なう」と答え、「時々行なう」が77.4%、「行なわない」が9.7%であり、優グループに比べ消極的であるのがわかる。特に、示範を「行なわない」と答えているのは劣グループの女子のみで、26.2%の者が示範を行なっていないが、その代りに上手な子どもを使ったり、話だけで済ませるなどして指導をしている。

体育の授業中の指導の留意点としては、優グループでは、「技能」「体力」「態度」「安全」の4つの側面のうち、「態度」であるとする者が39.1%で一番多く、劣グループでは「安全」であるとする者が36.2%で一番多い。したがって、体育の授業中の留意点には、優グループと劣グループの意識とに差がみられたが、この問題は学年や領域の特性と深い関連があると思われるので、今後の問題として着目していきたい。

表-21 グループ別の体育の指導の留意点

程度	全 体			優グループ			劣グループ		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
技 能	14.5	12.5	15.7	14.6	12.5	16.0	11.0	7.7	20.6
体 力	29.3	36.1	24.5	29.3	37.5	24.0	27.6	38.4	23.5
安 全	29.8	30.6	29.3	22.0	18.8	24.0	36.2	46.2	32.4
態 度	26.4	20.8	30.3	39.1	31.2	36.0	19.2	7.7	23.5

以上、教科に対する意識と授業運営に関する問題について述べてきたが、体力・技能の有無がかなりの意識の差となってあらわれており、指導上、積極的あるいは消極的な差となってあらわれているのがわかった。最後に授業以外の教科外の時間に体力・技能のある・ないがどのような意識となってあらわれてくるかをみるために、休み時間や体育クラブなどにおける子どもとの接触の度合について調べた。

表-32 グループ別のクラブ活動(体育クラブ)の指導

程度	全 体			優グループ			劣グループ		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
している	57.5	73.8	46.2	81.3	72.7	85.7	54.4	63.6	52.4
していない	42.5	26.2	53.8	18.7	27.3	14.3	45.6	36.4	57.6

体育クラブの指導については表-32に示したとおり、優グループでは「している」が81.3%、「していない」が18.7%、劣グループでは「している」が54.4%、「していない」が45.6%であり、劣グループの方が体育クラブの指導をしていない。体育クラブを指導していない理由として「運動技能に自信がない」が一番多く、次いで「時間的余裕がない」をあげている。

表-33は教科外の時間に子どもと遊ぶかという問いに対しての結果であるが、優グループは「よく遊ぶ」が43.8%、残りはほとんど「時々遊ぶ」である。劣グループでは「よく遊ぶ」が31.4%、「時々遊ぶ」が57.0%、「遊ばない」が12.6%と優グループよりも「遊ばない」とする者が多くなっている。

表-33 グループ別の教科外の子どもの遊びの度合

程度	全 体			優 グ ル ー プ			劣 グ ル ー プ		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
よく遊ぶ	42.4	57.1	32.0	43.8	54.5	38.1	31.4	36.4	30.4
時々遊ぶ	53.1	42.1	60.9	53.1	45.5	57.1	57.0	63.6	56.5
遊ばない	4.5	0.8	7.1	3.1	0	4.8	12.6	0	13.1

上記の教科に対する意識や授業運営についてと同様、教科外の時間においても優グループが積極的傾向を示しているのに対して、劣グループは消極的な傾向を示している。また男子教員が積極的であるのに対し、女子教員は消極的な傾向を示している。

要約および今後の研究課題

本研究においては小学校助教諭の体力と技能の実態を把握するために各種の測定を実施するとともに、教科に対する意識や授業運営、教科外時間に対する意識および指導の実態を調査分析してきたが、若干の知見を得たのでここに報告する。

小学校助教諭における体力は文部省「スポーツ・テスト」の成績判定基準表などから推察すれば、同年令層に比べ、特別、優れているとも、劣っているとも思われない。

運動技能は女子教員の方が男子教員よりも低いことが認められ、特に器械運動に顕著であった。またボール運動の的的において、女子教員の投能力の低さが認められた。

運動技能と年齢との関係については、標本が少なく、相関係数を算出していないので判定できず、今後の研究に待つべきところが多いが、男子教員は加齢に伴ない運動技能が低下する傾向にあるように思われる。

体育は小学校助教諭にとって比較的指導しやすい教科と考えられ、運動領域別指導の難易性においては、できる・できないが明確にあらわれるような水泳や器械運動、そして、ダンスに指導しにくいと考える者が多く、その

領域に性差がみられた。

体育の各運動領域別指導の難易性については、我々の考える意識と小学校助教諭の意識とにギャップがみられた。

小学校助教諭の体育の授業時および教科外の児童との接触において、女子教員よりも男子教員の方が行動面やや積極的であった。

体力・技能のある・ないが教科体育に対して、かなりの意識の差となっておりあらわれている。すなわち、体力・技能の優れている者は体育に対して積極的傾向にあり、意識が高いが、体力・技能の劣っている者は消極的傾向にあり、意識が低い。

女子教員の技能の低さは意識や行動面で消極的傾向にさせやすいことを考えると、女子の体育の教材研究は技能を中心とした展開を考慮すべきであると思われる。

今回の研究は、まず手始めとして、資料の入手しやすい、本学に夜間聴講生として通学してきている助教諭について調査してきたが、諸々の問題と取り組むなかで、標本が少数であることが影響して、明確な結果をだすことはできなかった。また体育の各運動領域別指導の難易性には、我々の意識と助教諭との意識とにギャップがみられたが、これはどんな点にあるのかについて詳細に調査したいと思うので、標本を増し、体力、技能の測定項目の検討とともに、意識調査の質問方法なども検討すべきであると思われる。

今後の研究課題としては、本研究は過去の運動経験の有無、教職経験、年齢、出身学部などと深い関係をもつと思われるので、これらにおける差異を、さらには対象者を助教諭に限らず、教育学部の学生、現場の教員にまで広げ、調査検討していきたい。

稿を終えるにあたり、共同研究者であった東洋大学の穂田清助教授の御協力に感謝の意を表する。

参 考 文 献

- (1)文部省：小学校指導書体育編，東洋館出版社，1969.5.
- (2)野口七郎：女子師による体育指導の実態と問題点—女子と教材—，体育学研究，15—5，日本体育学会，第21回大会号。
- (3)亥野他：小学校体育についての現職教員および教員志望者の意識と指導資質に関する研究，日本体育学会，第25回大会号。
- (4)東京学芸大学保健体育学科調査研究委員会：小学校婦人教師の体育指導に関する調査，1975。
- (5)文部省体育局：体力・運動能力調査報告書，1975。
- (6)矢野久英：運動への学習，日本体育社，1974。
- (7)Vanniet, M. Teaching Physical Education in Secondary Schools Saunders Second Edition, 1975.
- (8)Evelynl. Schurr. Movement Experiences for Children, 1975.

第1図 ヨーロッパの温量指数線図

